

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

6月16日にシャンティイで行われた仏国におけるオークス「G1ディアヌ賞(芝2100m)」を制したスパークリングプレンティ(牝3、父キングマン)が、今月のこのコラムの主役だ。

ロイヤルアスコットのG3、ジャージーS(芝7F)を制した他、パリロンシャンのG1ジャンルクラガルド賞(芝1400m)で2着となったノーブルトゥルースの全妹にあたるスパークリングプレンティは、仏国産馬だが、日本の競馬ファンにも馴染みの深いファミリーを背景に持つ。というのも、同馬の母スペリタの8歳年上の半姉が、仏国と米国で6つのG1を制したスタセリタなのだ。母となったスタセリタが、2年連続牝馬チャンピオンとなったソウルスターリング、G3アルテミス勝ち馬シェングランツの母となり、娘のサザンスターズが2冠牝馬スターズオナーズの母となったことは、本誌の読者ならばよくご存知のはずだ。

スパークリングプレンティやスタセリタを生産したのは、ジャン・ピエール・ジョセフ・デュボワ氏だ。この御仁、仏国ではトロット競馬の世界で、馬主として、生産者として、調教師として、さらにはドライバーとして、数々の大レースを制したことでおおいに名を知られた人物である。スタセリタを生産したことでわかるように、サラ

ブレッド競馬との関わりも深く、最近では、フロリダのOBS4月2歳セールで仕入れた後、仏国でデビューさせてG1パリ大賞(芝2400m)を制したオネストの馬主として知られている。オネストが3歳春にG2グレフェール賞(芝2100m)を制した時点までは、100%の所有権を保持していたが、重賞初制覇を機に権利の半ばを売却。同馬が3歳秋にG1ジャンC(芝2400m)に参戦した時には、子息のジャン・エティエンヌ・デュボワ氏が、共同馬主の一人に名を連ねていた。

2021年4月27日に生まれたスパークリングプレンティは、翌年の8月に開催されたアルカナ・ドゥヴィル1歳市場に上場されたものの、60万ユーロ(当時のレートで約8279万円)で主取りとなり、生産者の所有馬としてデビューすることになった。パトリス・コッティエール厩舎の管理馬となったスパークリングプレンティは、昨年10月にマルセイユポレリーで行われた牝馬限定の条件戦「芝1700m」でデビューし、ここを3馬身差で制して緒戦勝ち。続いて出走した同じくマルセイユポレリーのLRデラアンテ賞(芝1700m)、年が明けて2月に走ったシャンティイの条件戦(AW1600m)をいずれも白星で通過し、無敗の3連勝を飾った。

しかし、4戦めとなったサンクルーのL

Rカマルゴ賞(芝1600m)で3着に敗れ、連勝がストップ。続くパリロンシャンのG3ラグロッド賞(芝1600m)5着、同じくパリロンシャンのG1仏千ギニー(芝1600m)6着と、今度は3連敗を喫してしまつた。だが、6月2日にシャンティイで行われたG2サンドリガム賞(芝1600m)では、2着以下に3馬身差をつける完璧な競馬振りを見せ、重賞初制覇。そこから、中1週での参戦となったのが、G1ディアヌ賞だった。

当初は、サンドリガム賞で同馬を勝利に導いたクリスチャン・デムーロが騎乗予定だったが、落馬負傷のため、トニー・ピッツコーネが手綱をとったスパークリングプレンティは、道中後方待機から、直線で父キングマンを彷彿される鋭い瞬発力を発揮し、残り1Fを切った辺りで先頭に立つて優勝。鮮やかなクラシック制覇を成し遂げた。

スパークリングプレンティは、翌17日に英国で開催されたゴラス・ロンドン市場に上場され、リングでは810万ポンド(約16億5135万円)で主取りになった後、直接交渉で、シエイク・ジョアンのアルシヤカブ・レーシングが、権利の50%を500万ポンド(約10億0194万円)で購入している。